

ベルリン・フィルのレパートリーの実証研究

首席／客演指揮者のレパートリー形成

井上 登喜子

Abstract

This is an empirical analysis of the repertoires of the *Berliner Philharmoniker*, one of the most prestigious and influential symphony orchestras in the world. This study analyzes 20,025 performances in 7,120 subscription concerts given by the *Berliner Philharmoniker* between 1933 and 2014 in order to figure out the nature and extent of the conformity of orchestral repertoires. In particular, this study focuses on the difference between the repertoires performed by chief and guest conductors in order to examine the division of roles between them. My findings show that chief conductors frequently perform the core repertoires centered on the few composers that dominate orchestral repertoires on the one hand, and guest conductors contribute to bring variety to the repertoires on the other hand. The analysis reveals that the conformity of orchestral repertoires decreases over time during the period, and the difference of repertoires between chief and guest conductors is diminished mainly by increasing probability that chief conductors of recent years perform wider range of repertoires.

1. はじめに

欧米で十九世紀に誕生し、二十世紀に日本とアジア諸国をはじめ、世界的に普及したシンフォニー・オーケストラは、「クラシック」音楽界を代表する最大の音楽制度のひとつとして芸術振興的、啓蒙的役割を担う一方、聴衆の需要に応え、それを喚起していく商業団体としての側面も持つ。オーケストラの供給するレパートリーは、楽団や首席指揮者等の芸術的意向の反映と、聴衆の好みへの配慮を通して形成される。従って、オーケストラのレパートリー形成について研究することは、時代や地域や団体に固有の（あるいはそれらを超えて共通の）楽曲需給のメカニズムを解明する手がかりを与える、音楽受容研究における重要なテーマのひとつと言える。

本研究は、「ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団」¹（以下、「ベルリン・フィル」と略す）の演奏会を研究対象とし、そのレパートリー形成の実証研究を行うものである。ベルリン・フィルは、楽団創設（1882年）以来の歴代指揮者との演奏会活動、創設直後より積極的に行われた演奏旅行、レコーディングとメディア進出、近年の「教育プロジェクト」を始めとする多角的な取り組み等を通して、世界的に最も影響力をもってきたオーケストラのひとつである。ベルリン・フィルのオーケストラ活動とレパートリー形成の研究は、日本や他地域におけるオーケストラ活動の展開を研究する上での重要な参照点ともなる。

本稿は、ベルリン・フィルの定期演奏会のレパートリー・データの定量的把握と統計的検証を通して、レパートリー形成の全体傾向とその時代的変遷を明らかにすることを目的とする。特に、本稿では首席指揮者と客演指揮者のレパートリー形成から、その役割分担の変化に注目している。客演指揮者は、楽団や首席指揮者の意向を反映しながら、レパートリーに多様性をもたらすことが期待されているという予測のもと、レパートリーの集中度に関して、各時代区分および首席／客演指揮者間での傾向の差を検証する。

2. データおよびサンプル

本研究で使用するサンプルは、ベルリン・フィルの公式ウェブサイト上の「シーズン・アーカイブ」で公開される演奏会記録データファイルに基づくものである²。「シーズン・アーカイブ」は、2014年8月時点で、1933/34シーズンから2013/14シーズンまでの演奏会データを公開しており、これは現在入手可能なベルリン・フィルの演奏会記録のうち、もっとも長期間にわたり、網羅的にまとめられたデータである³。本研究では、この定期演奏会レパートリーのデータをすべて手入力で取得・整備し、データベースを構築している⁴。

本研究のサンプルについては、表1にまとめている。当該期間の演奏曲目サンプル総数は23,489であり、そのうち、本拠地ベルリンで開催された7,120回の「フィルハーモニー・コンサート」⁵（以下、「定期演奏会」と呼ぶ）と、演奏曲目20,025（延べ数）を分析対象サンプルとする⁶。なお、楽団設立の1882年から1932/33シーズンまでと、1937/38、1938/39、1939/40の各シーズンのデータは現時点で未公開のため、今回のサンプルには含まれない。

グラフ1は定期演奏会の開催数と演奏曲目数の推移を示したものである。第二次世界大戦後の1945/46シーズン以降、定期演奏会の開催数は1シーズンあたり百回程度（平均100.7回、標準偏差14.7）、一回の演奏会の演奏曲目数は二から三曲（平均2.8曲、標準偏差0.29）となり、安定的な演奏活動が繰り広げられていることが分かる。また、演奏のうち、首席指揮者が四分の一弱を、客演指揮者が残りの四分の三を占め、客演指揮者が大多数を占めることが分かる（表1参照）。

3. サンプルの特徴

本節では、本サンプルの特徴について、指揮者と演奏曲数の関係（3-1）、及びレパートリーの全体傾向（3-2）の視点から説明する。

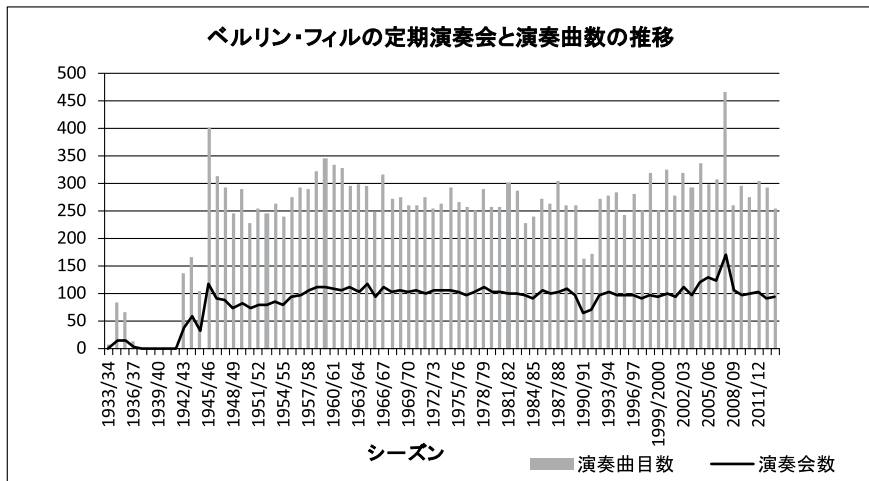
3-1. 指揮者と演奏曲数

表1は、分析対象サンプルである演奏会及び演奏曲の時代別、指揮者別件数を示したものである。時代区分は、首席指揮者（及び代理指揮者）の在任期間に基づき、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー（Furtwängler, Wilhelm 1886-1954）時代⁷、セルジュ・チェリビダッケ（Celibidache, Sergiu 1912-1996）時代⁸、ヘルベルト・フォン・カラヤン（Karajan, Herbert von 1908-1989）時代、クラウディオ・アバド（Abbado, Claudio 1933-）時代、サー・サイモン・ラトル（Rattle, Sir Simon 1955-）時代⁹の五つに分類した。また、年区分は演奏会シーズン、すなわち9月を起点とする1年間で示した¹⁰。

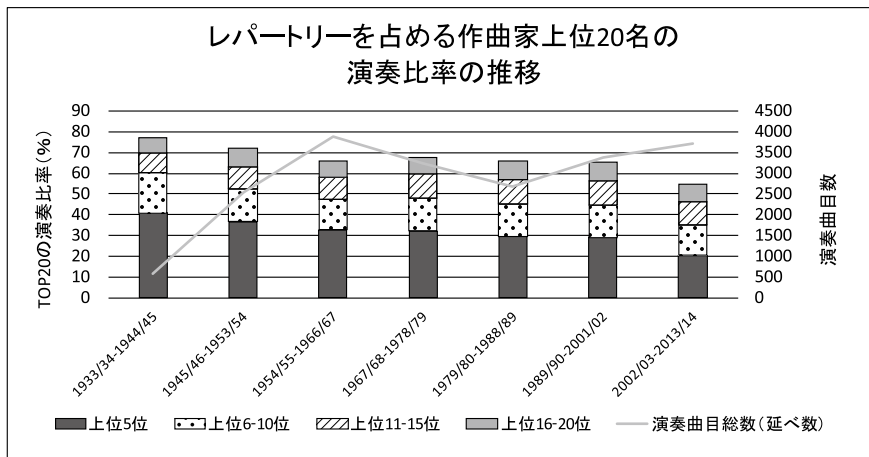
各時代の演奏会数と演奏曲数は、首席指揮者の在任期間により規模にばらつきがあるが、一演奏会あたり演奏曲数をみると、フルトヴェングラー時代は約3.5曲、チェリビダッケ時代には約3曲と減少し、カ

表1 分析サンプル： 演奏会数と演奏曲数

時代区分 シーズン	首席指揮者 (代理指揮者)	定期演奏会		指揮者別演奏曲数		欠損値	
		演奏 会数	曲数	首席指揮者 曲数 (%)	客演指揮者 曲数 (%)	曲数	(%)
1933/34-1944/45	Furtwängler	168	587	87 (14.8%)	429 (73.1%)	71	(12.1%)
1945/46-1953/54 (1952/53-53/54)	Celibidache Furtwängler	857	2,540	956 (37.6%) 245 (9.7%)	1,323 (52.7%)	16	(0.6%)
1954/55-1988/89	Karajan	3,544	9,800	1,222 (12.5%)	8,525 (87.0%)	53	(0.5%)
1989/90-2001/02	Abbado	1,201	3,387	911 (26.9%)	2,411 (71.2%)	65	(1.9%)
2002/03- 2013/14	Rattle	1,350	3,711	1,155 (31.1%)	2,154 (58.1%)	402	(10.8%)
計		7,120	20,025	4,576 (22.9%)	14,842 (74.1%)	607	(3.0%)



グラフ1 ベルリン・フィルの定期演奏会と演奏曲数の推移



グラフ2 レパートリーを占める作曲家上位20名の演奏比率の推移

ラヤン時代以後は約2.8曲で安定していることが分かる。

表1の指揮者別演奏曲数をみると、分析対象期間全体にわたって客演指揮者が高い割合を占めており(客演指揮者合計74.1%)、中でもカラヤン時代は客演指揮者の演奏比率が最も高く(首席12.5%、客演87.0%)、アバド時代(首席26.9%、客演71.2%)、ラトル時代(首席31.1%、客演58.1%)と進むにつれて、首席指揮者の演奏比率が増すことが分かる。

表2は、各時代の客演指揮者の上位10名と演奏曲数についてまとめたものである。時代ごとに概観すると、1933/34シーズン以降のフルトヴェングラー時代は、客演指揮者34名(429曲)のうち、上位10名が90パーセントを超える高い演奏比率を示しており(398曲、92.8%)、中でもロシア出身のドイツ人指揮者レオ・ボルヒャルト(Borchard, Leo 1899-1945)¹¹が群を抜いている(243曲、56.6%)。ボルヒャルトの死後、代理指揮者となったルーマニア人のチェリビダッケの時代は、客演指揮者の演奏比率は全体の52.7%(表1)に下がり、客演指揮者70名(1,323曲)のうち、上位10名の演奏比率も前の時代と比べて減少し(694曲、52.5%)、チェリビダッケの定期演奏会への積極的な関与が見て取れる¹²。カラヤン時代には、客演指揮者は最多の289名(8,525曲)を数える。上位10名の演奏比率(2,116曲、24.8%)も相対的に低く、少数特定の客演指揮者に偏らず、多数の指揮者が入れ替わり立ち替わりベルリン・フィルを指揮する体制だったことが分かる。客演指揮者の約三分の二(289名中199名、演奏曲数合計969曲)は、演奏曲数が9曲以下、すなわち、一〜三回しか演奏会に出演していない。アバド時代からラトル時代にかけては、首席指揮者の演奏会への関与が高まり、少数特定の客演指揮者への偏りも次第に均されていく(客演指揮者上位10名の演奏比率:アバド時代55.7%、ラトル時代39.2%)。こうした客演指揮者の人数の多さと演奏比率の高さは、レパートリー形成における客演指揮者の重要性を示唆している。

客演指揮者の人数の多さとならんで、その多様性も注目される。一例を挙げれば、(一)長期間にわたり客演指揮者を務めたドイツ人及びオーストリア人指揮者(カール・ベーム [オーストリア]、オイゲン・ヨッフム [ドイツ]、ハンス・クナッパーツブッシュ [ドイツ])、(二)国際的指揮者(ベルナルト・ハイティンク [オランダ]、ズーピン・メータ [インド]、リッカルド・ムーティ [イタリア]、ロリン・マゼール [米国]、ジェームズ・レヴァイン [米国]、マリス・ヤンソンス [ラトビア]、小澤征爾 [日本]、グスターボ・ドッダメル [ベネズエラ])、(三)自作を指揮する作曲家(ピエール・ブーレーズ)、(四)古楽などオーケストラにとっての新規分野の専門家(ニコラウス・アーノンクール)など、客演指揮者は、その出身地や国籍、年齢、キャリア形成の点で多岐にわたる。先行研究もベルリン・フィルの客演指揮者の役割の重要性に言及しているように(Stiftung Berliner Philharmoniker(Hg.) 2007: 216-222; 359-365, Allihn1994: 1452, ハフナー2009: 257-260, クライネルト2007: 118-149)、客演指揮者は、人数の多さと多様性の点で、ベルリン・フィルのレパートリー形成の重要な要因の一つであると指摘できる。

3-2. レパートリーの全体傾向

本節では、ベルリン・フィルの定期演奏会におけるレパートリー形成の全体傾向を、レパートリーの作曲家レベルでの分類に基づいて説明する。第一に、レパートリーを占める上位20名の作曲家を一覧し、第二に、レパートリーにおける作曲家の集中度、第三に、新たにレパートリーに導入される新規作曲家の人数をそれぞれ示すことにより、レパートリーの傾向とその時代推移を明らかにする。

(1) 作曲家上位20名とその時代推移

表3は、定期演奏会のレパートリーを占める上位20名の作曲家を時代区分ごとに抽出し、まとめたもの

表2 客演指揮者と演奏曲数

a. フルトヴェングラー時代(1933/34-1944/45)			b. チェリビダツケ時代(1945/46-1954/55)		
客演指揮者	演奏曲数	(%)	客演指揮者名	演奏曲数	(%)
Leo Borchard (1899-1945)	243	56.6%	Leopold Ludwig (1908-1979)	108	8.2%
Hans Knappertsbusch (1888-1965)	38	8.9%	Joseph Keilberth (1908-1968)	92	7.0%
Robert Heger (1886-1978)	23	5.4%	Arthur Rother (1885-1972)	88	6.7%
Karl Böhm (1894-1981)	18	4.2%	Leo Blech (1871-1958)	75	5.7%
Eugen Jochum (1902-1987)	16	3.7%	Sir Georg Solti (1912-1997)	67	5.1%
Hermann Abendroth (1883-1956)	15	3.5%	Hans Knappertsbusch (1888-1965)	64	4.8%
Carl Schuricht (1880-1967)	14	3.3%	Robert Heger (1886-1978)	61	4.6%
Walter Sieber (生没年不詳)	12	2.8%	Karl Böhm (1894-1981)	50	3.8%
Herbert von Karajan (1908-1989)	10	2.3%	Eugen Jochum (1902-1987)	45	3.4%
Johannes Schüller (1894-1966)	9	2.1%	Gerhart Wiesenhütter (1912-1978)	44	3.3%
上位10名合計	398	92.8%	上位10名合計	694	52.5%
その他 24名	31	7.2%	その他 60名	629	47.5%
計 34名	429	100%	計 70名	1,323	100%

c. カラヤン時代(1955/56-1988/89)			d. アバド時代(1989/90-2001/02)		
客演指揮者名	演奏曲数	(%)	客演指揮者名	演奏曲数	(%)
Eugen Jochum (1902-1987)	409	4.8%	Daniel Barenboim (1942-)	299	12.4%
Seiji Ozawa (1935-)	292	3.4%	Bernard Haitink (1929-)	154	6.4%
Karl Böhm (1894-1981)	245	2.9%	Sir Simon Rattle (1955-)	152	6.3%
Joseph Keilberth (1908-1968)	190	2.2%	Zubin Mehta (1936-)	142	5.9%
Sir John Barbirolli (1899-1970)	177	2.1%	Nikolaus Harnoncourt (1929-)	135	5.6%
Daniel Barenboim (1942-)	167	2.0%	James Levine (1943-)	117	4.9%
André Cluytens (1905-1967)	166	1.9%	Mariss Jansons (1943-)	116	4.8%
Riccardo Muti (1941-)	161	1.9%	Pierre Boulez (1925-)	89	3.7%
Zubin Mehta (1936-)	156	1.8%	Seiji Ozawa (1935-)	84	3.5%
Wolfgang Sawallish (1923-2013)	153	1.8%	Sir Roger Norrington (1934-)	54	2.2%
上位10名合計	2,116	24.8%	上位10名合計	1,342	55.7%
その他 279名	6,409	75.2%	その他 79名	1,069	44.3%
計 289名	8,525	100%	計 89名	2,411	100%

e. ラトル時代(2002/03- 2013/14)		
客演指揮者名	演奏曲数	(%)
Bernard Haitink (1929-)	133	6.2%
Christian Thielemann (1959-)	114	5.3%
Nikolaus Harnoncourt (1929-)	93	4.3%
Claudio Abbado (1933-)	90	4.2%
Daniel Barenboim (1942-)	87	4.0%
Gustavo Dudamel (1981-)	76	3.5%
Zubin Mehta (1936-)	76	3.5%
David Zinman (1936-)	63	2.9%
Pierre Boulez (1925-)	59	2.7%
Mariss Jansons (1943-)	54	2.5%
上位10名合計	845	39.2%
その他 103名	1,309	60.8%
計 113名	2,154	100%

表3 レパートリーにおける作曲家上位20名の一覧

a. 1933/34-1944/45			b. 1945/46-1953/54			c. 1954/55-1966/67		
作曲家	度数	%	作曲家	度数	%	作曲家	度数	%
Ludwig van Beethoven	84	14.3	Ludwig van Beethoven	370	14.6	Ludwig van Beethoven	397	10.2
Johannes Brahms	50	8.5	Wolfgang Amadeus Mozart	191	7.5	Wolfgang Amadeus Mozart	329	8.5
Robert Schumann	37	6.3	Johannes Brahms	171	6.7	Johannes Brahms	263	6.8
Richard Wagner	35	6.0	Peter Iljitsch Tschaikowsky	104	4.1	Richard Strauss	150	3.9
Wolfgang Amadeus Mozart	34	5.8	Richard Wagner	100	3.9	Johann Sebastian Bach	131	3.4
Richard Strauss	27	4.6	Franz Schubert	84	3.3	Joseph Haydn	131	3.4
Carl Maria von Weber	26	4.4	Joseph Haydn	84	3.3	Anton Bruckner	128	3.3
Peter Iljitsch Tschaikowsky	26	4.4	Johann (Sohn) Strauß	82	3.2	Igor Strawinsky	112	2.9
Antonin Dvorák	18	3.1	Johann Sebastian Bach	81	3.2	Robert Schumann	104	2.7
Johann (Sohn) Strauß	16	2.7	Richard Strauss	65	2.6	Peter Iljitsch Tschaikowsky	102	2.6
Anton Bruckner	14	2.4	Felix Mendelssohn Bartholdy	63	2.5	Paul Hindemith	97	2.5
Joseph Haydn	12	2.0	Robert Schumann	57	2.2	Antonin Dvorák	87	2.2
Franz Liszt	11	1.9	Igor Strawinsky	56	2.2	Gustav Mahler	80	2.1
Max Reger	11	1.9	Antonin Dvorák	53	2.1	Felix Mendelssohn Bartholdy	75	1.9
Bedřich Smetana	10	1.7	Anton Bruckner	49	1.9	Maurice Ravel	73	1.9
Johann Sebastian Bach	10	1.7	Carl Maria von Weber	47	1.9	Georg Friedrich Händel	71	1.8
Franz Schubert	8	1.4	Maurice Ravel	47	1.9	Franz Schubert	68	1.7
Georg Friedrich Händel	8	1.4	Claude Debussy	44	1.7	Claude Debussy	60	1.5
Hector Berlioz	8	1.4	Hector Berlioz	37	1.5	Béla Bartók	56	1.4
César Franck	7	1.2	Paul Hindemith	37	1.5	Sergej Prokofjew	47	1.2
上位20名の演奏曲目数合計	452	77.1	上位20名の演奏曲目数合計	1,822	71.8	上位20名の演奏曲目数合計	2,561	65.9
全体 (92名) の演奏曲目総数	587	100	全体 (174名) の演奏曲目総数	2,540	100	全体 (272名) の演奏曲目総数	3,890	100
d. 1967/68-1978/79			e. 1979/80-1988/89			f. 1989/90-2001/02		
作曲家	度数	%	作曲家	度数	%	作曲家	度数	%
Ludwig van Beethoven	334	10.3	Wolfgang Amadeus Mozart	265	9.9	Wolfgang Amadeus Mozart	273	8.1
Wolfgang Amadeus Mozart	292	9.0	Ludwig van Beethoven	210	7.8	Ludwig van Beethoven	240	7.1
Johannes Brahms	175	5.4	Johannes Brahms	137	5.1	Johannes Brahms	192	5.7
Anton Bruckner	126	3.9	Anton Bruckner	94	3.5	Richard Strauss	143	4.2
Joseph Haydn	116	3.6	Antonin Dvorák	94	3.5	Gustav Mahler	139	4.1
Peter Iljitsch Tschaikowsky	113	3.5	Richard Strauss	93	3.5	Igor Strawinsky	118	3.5
Antonin Dvorák	111	3.4	Peter Iljitsch Tschaikowsky	90	3.4	Maurice Ravel	113	3.3
Igor Strawinsky	105	3.3	Joseph Haydn	79	2.9	Peter Iljitsch Tschaikowsky	101	3.0
Robert Schumann	90	2.8	Robert Schumann	79	2.9	Robert Schumann	98	2.9
Béla Bartók	86	2.7	Sergej Prokofjew	70	2.6	Anton Bruckner	88	2.6
Franz Schubert	86	2.7	Felix Mendelssohn Bartholdy	68	2.5	Dmitri Schostakowitsch	88	2.6
Gustav Mahler	79	2.4	Johann Sebastian Bach	67	2.5	Richard Wagner	86	2.5
Johann Sebastian Bach	78	2.4	Igor Strawinsky	66	2.5	Joseph Haydn	78	2.3
Richard Strauss	74	2.3	Béla Bartók	61	2.3	Felix Mendelssohn Bartholdy	76	2.2
Felix Mendelssohn Bartholdy	64	2.0	Gustav Mahler	59	2.2	Antonin Dvorák	74	2.2
Maurice Ravel	60	1.9	Richard Wagner	57	2.1	Sergej Prokofjew	69	2.0
Sergej Prokofjew	50	1.5	Franz Schubert	56	2.1	Béla Bartók	68	2.0
Paul Hindemith	48	1.5	Hector Berlioz	47	1.8	Franz Schubert	63	1.9
Jean Sibelius	45	1.4	Dmitri Schostakowitsch	43	1.6	Hector Berlioz	59	1.7
Hector Berlioz	41	1.3	Maurice Ravel	37	1.4	Giuseppe Verdi	56	1.7
上位20名の演奏曲目数合計	2,173	67.3	上位20名の演奏曲目数合計	1,772	66.1	上位20名の演奏曲目数合計	2,222	65.6
全体 (196名) の演奏曲目総数	3,230	100	全体 (195名) の演奏曲目総数	2,680	100	全体 (198名) の演奏曲目総数	3,387	100
g. 2002/03-2013/14								
作曲家	度数	%						
Ludwig van Beethoven	184	5.0						
Wolfgang Amadeus Mozart	161	4.3						
Johannes Brahms	160	4.3						
Franz Schubert	129	3.5						
Richard Strauss	128	3.4						
Gustav Mahler	120	3.2						
Robert Schumann	119	3.2						
Antonin Dvorák	106	2.9						
Joseph Haydn	98	2.6						
Maurice Ravel	94	2.5						
Béla Bartók	92	2.5						
Igor Strawinsky	86	2.3						
Anton Bruckner	82	2.2						
Dmitri Schostakowitsch	81	2.2						
Johann Sebastian Bach	76	2.0						
Richard Wagner	69	1.9						
Peter Iljitsch Tschaikowsky	69	1.9						
Claude Debussy	67	1.8						
Anton Webern	62	1.7						
Jean Sibelius	56	1.5						
上位20名の演奏曲目数合計	2,039	54.9						
全体 (276名) の演奏曲目総数	3,711	100						

である。時代区分は、原則として、首席指揮者（代理指揮者）の在任期間で区切っているが、カラヤン時代については在任期間が長期にわたるため、ほぼ均等に三時代（時代c, d, e）に分けた。

各時代の上位5名の作曲家に注目すると、分析対象期間の全ての時代にわたり、L.v. ベートーヴェン、W.A. モーツァルト、J. ブラームスが生まれ、さらに、時代b [チェリビダック時代]以降は、これら3名が上位3位を独占していることが分かる。また、4位と5位には、R. ヴァーグナー、P.I. チャイコフスキー、R. シュトラウス、J.S. バッハ、A. ブルックナー、J. ハイドン、A. ドヴォルザーク、G. マーラー、F. シューベルトが名を連ねる。さらに、上位10位までに注目すると、R. シューマン、C.M.v. ウェーバー、J. シュトラウス、I. ストラヴィンスキー、S. プロコフィエフ、B. バルトーク、M. ラヴェルが加わる。

作曲家上位20名を通年で概観すると、レパートリーの主軸は、古典派とロマン派のドイツとオーストリア（ドイツ語圏）の作曲家を中心とし、そこにバロックから20世紀までのドイツ、フランス、ロシア、東欧・北欧の作曲家が加わり、構成されることが分かる¹³。こうしたレパートリーの主軸は、時代が進むにつれて新たに参入する作曲家はいるものの、全体としては大きな変化は見られない。

さらに、各時代の作曲家総数及び演奏曲目総数と、上位20名による演奏曲目数及び比率に注目すると、レパートリーにおける上位20名の作曲家の集中の度合いが全時代を通じて極めて高いこと、こうした集中（占有）は、しかしながら、時代とともに、徐々に減少していることが分かる（表3とグラフ2参照。時代a [1933/34-1944/45、フルトヴェングラー時代]：77.1%、時代g [2002/03-2013/14、ラトル時代]：54.9%）。

(2) レパートリーの集中度

一般に、演奏家や演奏団体の演奏レパートリーの特徴について言及する際に、「保守的／進歩的」や「伝統的／前衛的」という二項対立の観点から述べられることが多い。いわゆる「クラシック音楽」の音楽制度に限定した場合、古典派やロマン派の作品のように、くり返し演奏されて「定番」となった過去の音楽をレパートリーの軸に置けば前者（保守的・伝統的）に、演奏機会の少ない同時代音楽を取り上げれば後者（進歩的、前衛的）に分類され、また、従来演奏されなかった過去の音楽の発掘などはレパートリー拡大への貢献と捉えられる。しかしながら、こうした価値判断を含むレパートリー評価には、絶対的基準があるわけではなく、同一人物や同一団体に関する評価であっても、時代や状況ならびに評者の視点によって多義的になり得る¹⁴。本稿では、こうした多義的観点から離れて、データの定量的把握を通してレパートリーの傾向を捉えることを試みる。

ここでは、レパートリーにおける作曲家の集中度を調べるために、ハーフィンダール・ハーシュマン指数（Herfindahl-Hirschman Index. 以下、HHIと略す）を用いる。HHIは、経済学において、ある産業における上位企業の売上シェア（市場占有率）の集中度を測る指数のひとつで、その産業に属する全ての企業の市場占有率の二乗和を求めたものである。各企業のシェアの格差が大きく、市場に参加する企業が少ないほど、HHIは大きくなり、市場の寡占が進んでいると判断される。この指標は、音楽学においてもDowd2002やInoue2012が使用しており、本稿でも、オーケストラのレパートリーにおける作曲家の集中度（占有度）を調べるためにHHI指数を援用する。

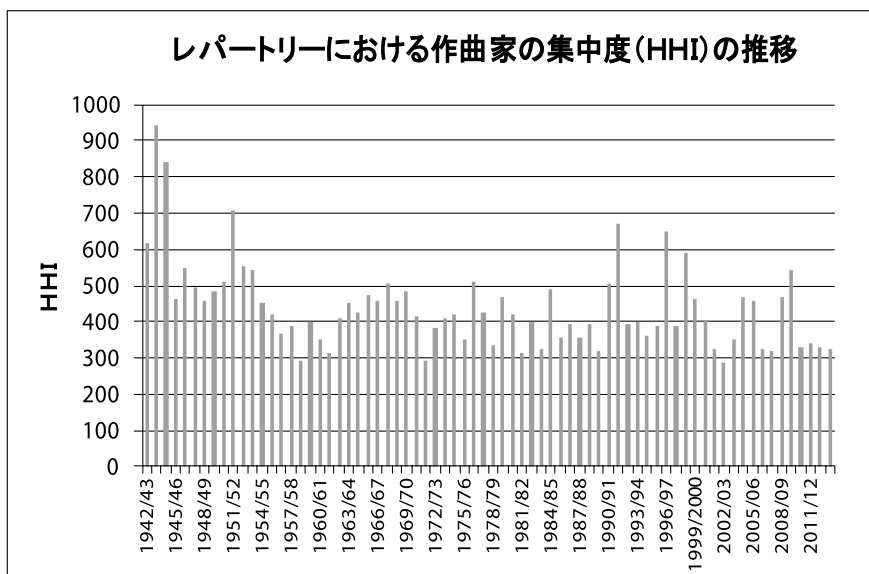
グラフ3は、ベルリン・フィルの定期演奏会で取り上げられたレパートリーにおける作曲家の集中度とその時代推移（各年）を示したものである。HHI指数は、1940年代から1950年代半ばにかけては500以上という数値を示すこともあるが、1956/57シーズン以降は400前後に、さらに、2002/03シーズン以降は300程度にまで減少する。この結果は、少数の作曲家によるレパートリーの集中度（占有度）が徐々に低下し、

より多くの作曲家に分散することを示している¹⁵。また、この減少傾向の起点は、1956/57年と2002/03年、すなわちカラヤンとラトルの首席指揮者就任直後のタイミングであり、本稿で採用している首席指揮者による時代区分が意味を持つことを示す。

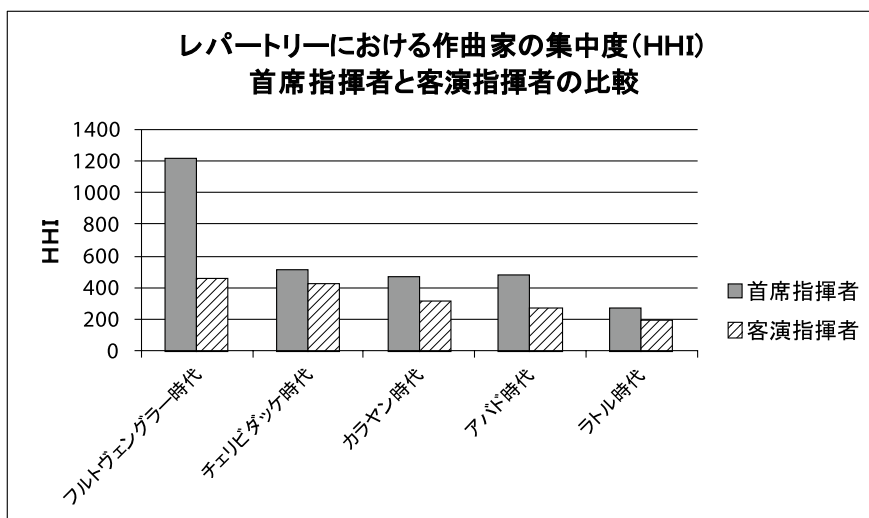
また、グラフ4は、レパートリーにおける作曲家の集中度、首席指揮者と客演指揮者の別で、時代ごとに比較したものである。通年でレパートリーの集中度が低下していくなか、首席指揮者に比べ、客演指揮者ではレパートリーの集中度がより低いことが明らかである。

(3) 新規作曲家の導入

前節では、ベルリン・フィルの定期演奏会レパートリーにおける、少数の特定の作曲家による集中度(占



グラフ3 レパートリーにおける作曲家の集中度の推移



グラフ4 レパートリーにおける作曲家の集中度：指揮者別比較

有度)と、時代経過とともにみられる低下傾向について確認した。こうした集中度の低下傾向は、多様な作曲家へのレパートリーの分散を意味し、より多くの「既出の作曲家」の演奏比率が高まることや、新たにレパートリーに導入される「新規作曲家」の人数が増えることを示唆する。

表4は、新しいレパートリーの導入の一傾向を捉えるために、新規に取り上げられた作曲家の人数をまとめたものである。今回の分析対象サンプルは1933/34シーズン以降のデータであり、それ以前の期間については分析対象外となるため、ここでは便宜的に、1933/34シーズンから1944/45シーズンまでに演奏された作曲家を「既出の作曲家」の基準とした。1945/46シーズン(チェリビダッケ在任期間)以降、2013/14シーズン(ラトル在任期間中)までに新規作曲家の人数は569名を数える。作曲家総数に対する新規比率が年代を追うごとに減少しているが、ラトル時代には上昇傾向が見て取れる。年代を追うごとに新規比率が減少することは、オーケストラにおける新曲の供給とそのレパートリー化を考慮すれば自然と言えることから、ラトルが積極的に新しいレパートリーを導入していることを示唆する。

新規作曲家の各年の人数はばらつきが大きく(1名~45名)、一貫した傾向を捉え難いが、相対的に人数が多いのは1947/48(24人)、1955/56(22人)、2001/02(17人)の各シーズンであり、チェリビダッケ、カラヤン、ラトルの就任時期と前後することから、首席指揮者の交替と新規のレパートリー形成の関係が示唆される¹⁶。

また、新規作曲家の導入への首席指揮者と客演指揮者の関わりについて言えば、全ての時代を通して、客演指揮者(合計)による導入数が多く、特にカラヤン時代はその傾向が顕著であることが分かる(表4参照)。

表4 レパートリーにおける新規作曲家の人数

時代区分		新規作曲家		
シーズン	首席指揮者	新規人数	作曲家総数	新規比率
1945/46-1953/54	Celibidache	113	489	23.1%
		(首席49 客演58 不詳6)		
1954/55-1988/89	Karajan	287	2158	13.4%
		(首席12 客演258 不詳17)		
1989/90-2001/02	Abbado	63	604	10.4%
		(首席5 客演53 不詳5)		
2002/03- 2013/14	Rattle	106	711	14.9%
		(首席18 客演32 不詳56)		

(注) 本研究のデータ・サンプルに基づき、1933/34シーズン以降を分析対象とし、それ以前については分析対象外とした。分析手順としては、1933/34から1944/45シーズンまでに取り上げられた作曲家を基準とし、1945/46シーズン以降、各年で新たに導入された作曲家を「新規作曲家」として数えた。

4. 仮説検証と分析結果

本節では、前節でまとめたベルリン・フィルの定期演奏会のレパートリーの特徴を踏まえ、レパートリーにおける作曲家の集中度に関する仮説を提示し、統計的検証を行う。

4-1. 仮説

前節で示したように、ベルリン・フィルの定期演奏会のレパートリー形成においては、少数の作曲家によるレパートリーの集中と、時代の経過とともに、その集中度に減少傾向が見られる。こうした傾向は、時代が進むにつれて、少数の特定の作曲家によるレパートリーの占有から、より多様な作曲家によるレ

パートリーへの分散、すなわちレパートリーの多様化を意味する。このようなレパートリーの集中度の低下は、米国(Dowd2002)と日本(Inoue2012)でも見られる。そこで、Dowd2002とInoue2012が米国と日本のオーケストラで実証的に検証している仮説を、ベルリン・フィルについても検証する。

仮説1：演奏会レパートリーにおける、少数の作曲家のレパートリーへの集中は、時代の経過とともに弱まる。

また、少数の特定の作曲家によるレパートリーの集中に関して、首席指揮者と客演指揮者の関与を比べると、全ての時代を通じて、客演指揮者においてレパートリーの集中度がより低いことを確認した。さらに、新規作曲家の導入に関しても、客演指揮者においてより多いことを確認した。従って、客演指揮者は、首席指揮者よりも多様な作曲家を取り上げる傾向があり、レパートリーの多様化の確保のために貢献していると判断される。以上から、下記の仮説2を検証する。

仮説2：各時代区分の演奏会レパートリーにおける、少数の作曲家のレパートリーへの集中は、首席指揮者と比較して、客演指揮者の方が低い。

以上、レパートリーにおける少数の特定の作曲家への集中は、時代により、指揮者の別により差がある、という仮説について分析する。

4-2. 分析方法

前節で示した2つの仮説を検証するため、演奏会で特定の曲目（ここでは作曲家上位5名に含まれるいずれかの曲とする）の演奏が行われるか否かという二値の選択に関し、各時代で、ならびに首席指揮者と客演指揮者という指揮者のグループ間で差があるか否かについて平均の差の検定を行う。一般に検定変数が連続変数の場合には、独立したサンプルのt検定を行うが、本分析では、検定変数は「演奏した」場合に1、「演奏しない」場合に0の二値変数となるため、二値変数を検定変数とする分析に適しているノンパラメトリック検定(Mann-WhitneyのU検定)も併せて行う。グループ化変数は時代と指揮者であり、時代については、分析対象期間の中間に位置する「カラヤン時代」を基準として、「カラヤン時代以前」と「カラヤン時代以後」との三時代間、指揮者については「首席指揮者」と「客演指揮者」の二グループ間に統計上有意な差があるかを分析する。

4-3. 分析結果

仮説1の、特定の曲目の演奏に関する、三時代間の平均の差の検定結果は、表5のとおりである。作曲家上位5名による曲の演奏に関して、「カラヤン時代」と「カラヤン時代以前」、「カラヤン時代以後」と「カラヤン時代」をそれぞれ比べた結果、両者とも有意なマイナスの結果を示した。これは、「カラヤン時代以前」から「カラヤン時代」へ、「カラヤン時代」から「カラヤン時代以後」へと時代が進むにつれて、作曲家上位5名の演奏が減少すること、すなわち、レパートリーにおける特定曲目への集中度が減少することを意味する。

以上の結果から、特定曲目の演奏、すなわち少数の作曲家のレパートリーへの集中は、時代の経過とともに弱まるという仮説1は支持される。

表5 時代と特定の曲目演奏に関する t 検定結果

カラヤン時代前後の作曲家上位5名の演奏に関する t 検定結果

(A) カラヤン時代以前	N	3,127
	該当数	1,122
	平均値	0.36
(B) カラヤン時代	N	9,800
	該当数	3,024
	平均値	0.31
(C) カラヤン時代以後	N	7,098
	該当数	1,651
	平均値	0.23
(B)-(A)	平均値の差の検定 (t 値)	-0.05*** (-5.144)
	Mann-WhitneyのU検定	0.000***
	平均値の差の検定 (t 値)	-0.76*** (-11.090)
(C)-(B)	Mann-WhitneyのU検定	0.000***

(注1) 括弧内はt値、***, ** はそれぞれ1%, 5%水準で有意であることを示す。

(注2) 検定変数が2値変数のため、ノンパラメトリック検定(Mann-WhitneyのU検定)も行ったが、t検定結果と同じ結果となった。

仮説2の、特定の曲目の演奏に関する、首席指揮者と客演指揮者の間の平均の差の検定結果は、表6のとおりである。作曲家上位5名による曲の演奏に関して、フルトヴェングラー時代からラトル時代までの首席指揮者と客演指揮者の間の差をそれぞれ比べた結果、フルトヴェングラー時代、カラヤン時代、アバド時代については、指揮者間に有意な差があり、チェリビダッケ時代とラトル時代については、指揮者間に有意な差はないという結果を得た¹⁷。ラトル時代では、上位5名の演奏では有意な差がないという結果となったが、上位10名と上位15名の演奏では有意な差があり、上位20名の演奏では有意な差はないとの結果だった。

以上の結果から、客演指揮者のレパートリーの集中度の方が低いという仮説2は、フルトヴェングラー時代からアバド時代にかけては、(チェリビダッケ時代を除けば)支持されるが、時代が下って、ラトル時代になると、頑健に支持されるとは言えない。

5. 分析結果のまとめと今後の課題

最後に、仮説1と仮説2の検証結果をまとめ、解釈を示す。

時代の経過とともにレパートリーの集中度が低下するという結果を得たが、集中度の推移をみると(グラフ4)、ラトル時代で初めて、首席指揮者は客演指揮者レベルと明確な差がなくなる。過去においては、首席指揮者がレパートリーの中核を築き、その定着を図ってきた一方、客演指揮者が多様化を維持するという異なる役割を担っていたと言える。しかし、ラトル時代になると、そうした首席/客演の役割分担は、首席指揮者のレパートリー集中度が大幅に低下することで不明瞭になる。これは商業オーケストラであるベルリン・フィルにおいて、その音楽の消費者である聴衆の需要がいわゆる「定番」以外のレパートリーにも拡張されたことを示す。ベルリン・フィルが客演指揮者に担わせてきたレパートリーの分散化という方針が、時代を経て、ラトル時代に結実したとの解釈が可能である。こうした傾向の変化が、ベルリン・フィルとその聴衆の需給バランスに基づく持続的なものか、ラトル個人の資質による一過性のものかは、

表6 指揮者と特定の曲目演奏に関する t 検定結果
指揮者と作曲家上位 5 名の演奏に関する t 検定結果

時代区分		全体	首席指揮者	客演指揮者	平均値の差の 検定 (t 値)	Mann-Whitney のU検定
分析対象全期間	N	20,025	4,576	15,449		
	該当数	5,797	1,497	4,300		
	平均値	0.29	0.33	0.28	0.049*** (6.243)	0.000***
フルトヴェングラー時代	N	587	87	500		
	該当数	221	44	177		
	平均値	0.38	0.51	0.35	0.152** (2.616)	0.007***
チェリビダツケ時代	N	2,540	1,201	1,339		
	該当数	901	442	459		
	平均値	0.35	0.37	0.34	0.025 (1.326)	0.185
カラヤン時代	N	9,800	1,222	8,578		
	該当数	3,024	479	2,545		
	平均値	0.31	0.39	0.30	0.095*** (6.432)	0.000***
アバド時代	N	3,387	911	2,476		
	該当数	949	312	637		
	平均値	0.28	0.34	0.26	0.085*** (4.729)	0.000***
ラトル時代	N	3,711	1,155	2,556		
	該当数	702	220	482		
	平均値	0.19	0.19	0.19	0.002 (0.137)	0.891

(注1) 括弧内は t 値、***, ** はそれぞれ 1%, 5%水準で有意であることを示している。

(注2) Top5 変数は 2 値変数であるため、ノンパラメトリック検定 (Mann-Whitney の U 検定) も行ったが、t 検定結果と同じ結果となった。

今後、ベルリン・フィルの活動を継続的に分析することで明らかにしたい。また、チェリビダツケ時代は、過去において、こうした取り組みを先取りしている特殊な事例であり、この時代についても深掘りしていきたい。

注

- 1) ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団は、2001年以前は演奏会活動ではベルリン市（行政上は州）の公共団体として“Berliner Philharmonisches Orchester”という名称を、レコーディングでは私的団体として“Berliner Philharmoniker”の名称を用いてきたが、2002年1月の財団法人化以後は、“Berliner Philharmoniker”という正式名称でコンサートもレコーディングも統一されるようになった（クライネルト2007：13）。本稿では日本語訳として定着している「ベルリン・フィル」の略称を用いる。
- 2) <http://www.berliner-philharmoniker.de/en/concerts/calendar/archive/>（2014年8月31日現在）。本稿では現時点で最も完成度が高い定期演奏会データを用いるが、本データファイルでは、それ以外にも、ベルリン・フィルの多岐にわたる音楽活動の記録が順次公開されている。具体的には、「室内楽」、「教育プロジェクト」、「オーケストラ・アカデミー」、「ベルリン音楽祭」、「フィルハーモニーに客演する演奏団体」、「演奏旅行」、「その他」の7項目が設けられている。分類基準の混乱が一部みられるが、更新作業が進めば、ベルリン・

フィルの音楽活動の体系的、網羅的なデータファイルになると思われる。

- 3) 紙媒体資料としては、ベルリン・フィル創立125周年に出版された記念誌の第二巻に、1982年から2007年までのシンフォニー・コンサート、室内楽コンサート、演奏旅行ならびに初演のデータが掲載されている。Stiftung Berliner Philharmoniker (Hg.) 2007, Band 2: Biografien und Konzerte, 140-378.
- 4) データの手入力については、科学研究費基盤研究 (C) 「実証分析による20世紀の交響楽団におけるレパートリー形成とその要因の国際比較研究」の2013年度研究支援者、東邦音楽大学のリサーチ・アシスタント宮城弦氏の作業協力を得た。データ整備及びデータベース構築については筆者自身が行った。
- 5) ベルリン・フィルの本拠地となる建物の名称「フィルハーモニー」にちなんで「フィルハーモニー・コンサート」と呼ばれる。いわゆる「定期演奏会」に相当するシンフォニー・コンサートであり、本稿では以下、便宜的に定期演奏会と呼ぶ。
- 6) 定期演奏会曲目20,025曲のうち、欠損値88曲を除外すると、内訳は「管弦楽作品」が19,551曲 (98.1%)、「それ以外の作品」が386曲 (1.9%) となる。「それ以外の作品」のジャンルは、ピアノやヴァイオリンの独奏曲、歌曲やアリア等の独唱曲である。
- 7) フルトヴェングラーの首席在任期間は1922/23から1944/45シーズンと、第二次世界大戦後の不在期間を経て、復帰後に終身契約を結んだ1952/53シーズンから1954年 (11月死去) までだが、今回のデータ・サンプルは1933/34シーズン以降のものであるため、本稿ではフルトヴェングラーとベルリン・フィルの1920年代の活動については扱わない。また、本サンプルのフルトヴェングラー時代はナチ政権下と重なる。第三帝国時代の政治的状況と本オーケストラの活動は分かちがたく結びついており、レパートリー形成にもその影響が反映されていると考えられるが (Trümpi2011とアスター2009を参照)、本稿はベルリン・フィルのレパートリーの通年での全体傾向を定量的に示すことを目的とするため、第三帝国時代のレパートリー形成の分析については稿を改めて論じることとする。
- 8) チェルビダッケは首席指揮者ではないが、フルトヴェングラー不在期間に代理指揮者として主導的役割を果たしたことから、独立した一時代として分類している。フルトヴェングラー復帰後に関しては、チェルビダッケ時代の下段に示した。
- 9) 首席指揮者在任中。
- 10) 首席指揮者の就任 (退任) 時期は、必ずしも演奏会シーズン開始 (終了) と一致するわけではないが、ここでは分析の空白期間が生じないように、便宜上シーズンの区切りを時代区分とした。
- 11) ボルヒャルトは、第二次世界大戦後のフルトヴェングラー不在期間に、代理指揮者としてベルリン・フィルと演奏活動を開始した直後、1945年8月に米英占領地区内で誤射され死去した。
- 12) なお、この時代はモラヴィア出身のレオポルト・ルートヴィヒが客演指揮者として最も頻繁に登場するが、チェルビダッケやルートヴィヒのような「政治的負目のない外国人」(ハフナー2007: 190) が積極的に指揮活動に携わったのは、戦後の占領国支配下という政治状況と無縁ではない。
- 13) このようなドイツ音楽への偏りは、ベルリン・フィルのみに見られる特徴というわけではない。ベートーヴェン、モーツァルト、ブラームス、ヴァーグナー、リヒャルト・シュトラウスといった作曲家がオーケストラ・レパートリーの上位を占めるのは、米国のメジャー・オーケストラ (Dowd2002) でも、日本のプロ・オーケストラ (Inoue2012) でもほぼ同様に見られる傾向である。
- 14) 例えば、1920年代のフルトヴェングラーやその前任者アルトゥール・ニキシュ (Nikisch, Arthur 1895-1922在任) は、従来取り上げられなかった同時代音楽をレパートリーに積極的に取り入れたことに対して「進歩的」と評される一方で、古典派・ロマン派音楽にレパートリーの基軸を置く姿勢を「保守的」と非難されもした (ハフナー73-74; 8-89; 98-104)。
- 15) オーケストラにおいてレパートリーの集中度 (占有度) が時代とともに下がる傾向は、ベルリン・フィルのみに見られる特徴というわけではない。米国のメジャー・オーケストラ (Dowd2002) と日本の職業オーケストラ (Inoue2012) の分析においても、サンプルによる年代の相違はあるが、同様にレパートリー集中度の低下傾向を確認している。
- 16) 2007/08 シーズンは新規作曲家45名と最多であり、楽団の創立125周年 (2007年) という記念年の演奏活動

との関連が予測されるが、指揮者のデータに欠損値が多く、今後調査を要する。

- 17) 同様に、作曲家上位10名、上位15名、上位20名の演奏に関しても分析した結果、フルトヴェングラー時代とカラヤン時代では、全てに関して指揮者間に有意な差があり、チェリビダッケ時代では全てに関して指揮者間に有意な差がないとの結果となった。

参考文献

Allihn, Ingeborg; et al.

1994 "Berlin," Finscher, Ludwig (Hg.) *Die Musik in Geschichte und Gegenwart. Allgemeine Enzyklopädie der Musik begründet von Friedrich Blume*. Sachteil 1 (A-Bog). Kassel; Stuttgart: Bärenreiter; Metzler: 1417-1486.

Aster, Misha アスター, ミーシャ

2007 *Das Reichsorchester: Die Berliner Philharmoniker und der Nationalsozialismus*. München: Siedler Verlag.

2009 日本語訳『第三帝国のオーケストラ：ベルリン・フィルとナチスの影』松永美穂・佐藤英訳、東京：早川書房。

Dowd, Timothy J.; et al.

2002 "Organizing the musical canon: the repertoires of major U.S. symphony orchestras, 1842 to 1969," *Poetics* 30: 35-61.

Haffner, Herbert ハフナー, ヘルベルト

2007 *Die Berliner Philharmoniker: Eine Biografie*. Mainz: Schott.

2009 日本語訳『ベルリン・フィル：あるオーケストラの自伝』市原和子訳、東京：春秋社。

INOUE, Tokiko 井上登喜子

2006 「20世紀初期の日本における管弦楽レパートリー形成」『お茶の水音楽論集特別号 徳丸吉彦先生古稀記念論文集』241-251.

2007a 「戦前の日本における管弦楽レパートリーの統計（1888年～1941年）」『お茶の水音楽論集』第9号：46-53.

2007b 「戦前の日本における西洋音楽の人気レパートリーに関する実証研究」『東邦音楽大学・東邦音楽短期大学研究紀要』第16輯：23-36.

2008 「洋楽レパートリーの形成要因の実証分析：1900年代前半の日本について」『民族藝術』VOL.24: 159-165.

2009 「戦前日本における学生オーケストラの曲目選択に関する実証研究」『音楽学』第55巻：53-67.

2012 "European classical music in non-Western culture: Japanese cultural identity seen in repertoire development in the 20th century," *Musics, Cultures, Identities: Proceedings of the 19th Congress of the International Musicological Society*: 370-371.

Kleinert, Annemarie クライネルト, アンネマリー

2005 *Berliner Philharmoniker: Von Karajan bis Rattle*. Berlin: Jaron.

2007 日本語訳『世界最高のオーケストラ：ベルリン・フィル』最上英明訳、東京：アルファベータ。

Muck, Peter

1982 *Einhundert Jahre Berliner Philharmonisches Orchester: Darstellung in Dokumenten*. Tutzing: Hans Schneider Verlag.

Stiftung Berliner Philharmoniker (Hg.)

2007 *Variationen mit Orchester: 125 Jahre Berliner Philharmoniker*. Band 1: Orchestergeschichte. Band 2: Biografien und Konzerte. Leipzig: Henschel.

Trümpi, Fritz

2011 “Repertoire und Politisierung: Nationalsozialistische Programmpolitik bei den Wiener und Berliner Philharmonikern,” *Politierte Orchester: Die Wiener Philharmoniker und das Berliner Philharmonische Orchester im Nationalsozialismus*. Wien; Köln; Weimar: Böhlau Verlag: 233-307.

Berliner Philharmoniker

www.berliner-philharmoniker.de/en/concerts/calender/archive/ (2014年8月31日現在)

※本論文は、平成24年度～平成26年度科学研究費基盤研究(C)「実証分析による20世紀の交響楽団におけるレパートリー形成とその要因の国際比較研究」(研究課題番号：24520174)の研究成果の一部である。